

**小樽市新型インフルエンザ対策行動計画
別冊**

**忘れられたパンデミック
- 北海道におけるスペイン・インフルエンザ惨状記録**

小樽市

平成18年2月

Feb. 2006

北海道内におけるスペイン・インフルエンザの足跡

スペイン・インフルエンザについて(スペイン風邪とも呼ばれていた。 Spanish flu)

1918年春から1919年にかけて2年近く世界で蔓延した新型インフルエンザは、世界で2000万人から1億人の犠牲者を出し、日本でも38万人の死者を出したことが記録されている。大正12年9月に発生した関東大震災での死亡者数が14万8千人であったことを考えると、死者数の上では相当の被害が起きたと考えられる。

最近の研究ではそのウイルスは鳥インフルエンザウイルスで、小さな変異が起きることにより、人の中で容易に感染する株に変化して世界的大惨事に陥ったと考えられている。現在ウイルスの型は分かっておりA型H5N1ウイルスであった。

現在世界的に広がっているA型H5N1鳥インフルエンザウイルスもいつ変異して、スペイン・インフルエンザのように世界的大流行、そして大惨事を起こすか分からないとWHOを初め、世界の研究者の間で言われている。

1918年5月末、フランスのマルセイユでインフルエンザが流行し始め、15日間で第一次世界大戦中の西部戦線の両軍兵士の間で蔓延した。その後このインフルエンザは2年近くの間、世界中に広がり続けた。非常に症状が重く、致死率が高く、全世界で2000万人から1億人が死亡した。当時の世界総人口は12億人にすぎなかったが、その半数が発病したとも言われている。

第一次世界大戦中のために欧州の主要国では情報が公開されず、唯一米国だけが詳細な情報を公開し、また記録も残っている。スペイン・インフルエンザという呼称は、スペイン王室で多く罹患したから、そのように言われている。

以下、北海道内を中心に大正7年から9年にかけて日本全国に蔓延した、当時の新型インフルエンザであるスペイン・インフルエンザの足跡を、北海タイムス新聞を中心とした資料をもとにまとめた。

概略年譜

年・月	世界の状況	国内の状況	道内の状況	小樽の状況
1918年 (大正7年)				
3～6月	第1波	流行無し	流行無し	流行無し
9～12月	第2波	流行の拡大	流行の拡大	流行の拡大
1919年 (大正8年)				
1～4月	小休止	流行継続	流行継続	流行継続
3～10月	第3波	小休止	小休止	小休止
10～12月	順次終息	流行再興	流行再興	流行再興
1920年 (大正9年)				
1～4月		流行継続	流行継続	流行継続
5月～		順次終息	順次終息	順次終息

備考

日本国内の流行は世界の第2波から始まり、終息は1920年春過ぎであるが、その後も郡部で致死率の高い流行が散発的に見られた。世界の第3波終息は1919年冬とされているが、日本の第3波の開始は世界の第3波終息頃から始まり、終息も世界に半年ほど遅れた。通常ス

ペイン・インフルエンザは世界的に、1918年から1919年(大正7年から8年)に流行と言われるが、日本の場合少しくずれて、1918年から1920年(大正7年から9年)に流行したと考えられる。

道内における流行の推移(北海タイムス紙報道から)

北海タイムス紙での流行開始に関する記事は、道内は大正7年(1918年)10月30日、小樽は11月3日が最初である。なお10月26日には東京での流行を“悪疫流行”と報じている。その後驚異的に発病者数と死亡者数が増加し、11月中旬には札幌の豊平火葬場の混雑の様子が伝えられ、小樽では11月に入って2週間で死亡者35名の発生が伝えられている。各地では休校が相次ぎ、死亡者が多いため墓地は非常に混雑し、棺桶も十分焼き切れていないと伝えられている。11月20日には留萌の33歳の主婦が家族全員が死亡したため、投身自殺した記事が見られる。

12月に入って間もなく小樽では既に2百数十名の死者が出ており、稲穂町の労働者一家が全員死亡したとの記事が見られる。札幌で死亡率が減ったとの記事も見られるが、広尾などの郡部では悲惨な死亡事例が相次いでおり、北海道全体としては流行は継続している。

大正8年1月に道庁でまとめた統計を見ると、流行開始と考えられる前年の10月から11月末までの死亡者数が道内で5008人とある。20~30歳代が多いのが特徴であるが、これは世界の記録と類似している。因みに死亡者の1番多かった年代が5歳以下、続いて25~30歳、そして20~30歳の順であった。40歳以上を全て合わせても25~30歳代よりも数は少ない。

1月から2月は北海道での流行は郡部が多かったようで、札幌や小樽ではそれほどの患者と死亡者は出ていなかったようだ。一方東京は1月から2月末まで中流行が続き、知名人等の死亡も相次いだようだ。小樽での1月1日から2月25日までの患者数442人、死者数4人と記録されている。

しかしながら3月に入ってから小樽での患者数は増加しはじめ、3月16日から31日までの半月間で患者数276人、死亡者数7人と記録されている。また岩内や芦別でも再流行し、芦別では死亡者が短期間で130名発生している。家族全員が死亡し、葬儀が出せない家庭の悲惨な記事も見られる。また旭川では3日間で突然505名の死亡者が発生したことが報じられている。多くは気管支肺炎と診断されている。

再び流行が国内で再興するのは10月頃からで、東京で報告されだしている。11月に入ると、小樽警察署では流感予防の通達や調査などに取り組み始めている。

大正9年元旦には北海道でも再流行しているのが確認され、多くの学校での休校が相次ぎだしている。学童での罹患率は30%に上っていた。札幌では12月20日から1月5日までに死亡者が50余名出ていた。全国的にも再流行の報告が相次ぎ、九州から北海道まで多数の患者と死亡者が報告されている。

1月16日の新聞では札幌の1日平均の死亡者数16名。火葬場で十分処理し切れていないと報道されている。小樽での発生数は比較的少ないと報道されているが、それでも1月1日から18日までに男237名、女210名が発病、死亡者数21名となっている。致死率は4.7%となる。

2月5日、小樽警察署では小樽区役所衛生係の協力のもとに、馬そり2台を借り受けて、流感予防啓発に市内を回り、チラシ等の配布を行っている。この日の道庁発表記事によると、前年12月1日以降、発生患者数は21961人で、死亡者数は1000人、致死率は4.6%であった。

3月になると小樽でも患者数は急増加しはじめ、3月17日の報道では、1月1日からの患者数3107名、死亡者数175名、致死率5.6%と報告されている。

4月以降は小樽や札幌での記事は見あたらないが、その代わり郡部での悲惨な記事が散見される。その中でも上ノ国周辺(現在の上ノ国町)での流行事例は悲惨の限りであった。上ノ国町史から当時の記録を資料に加える。他に根室、檜山、さらに6月にはエトロフ島での特派員報告として、悲惨極まりない状況が伝えられている。

要約

- 全道的患者数と死亡者数は新聞報道から明確に算出は出来ないが、大正8年12月26日の内務省発表の本道の記録によると、初発以来の患者数は49万人、死亡者数8507人となっている。これはいわゆる第2波における数値である。この後流行は続くが、2月5日に道庁発表のデータによると、先の発表以降の患者数は2万2千人、死亡者数1千人となっている。この後も患者数と死亡者数は発生しているから、最終的患者数と死亡者数を算出することは不可能

であるが、これらのデータから、北海道における患者数は51万人以上、死亡者数1万人以上と推定される。致死率は1.86%、全人口に対する罹患率は21.6%となる。しかしながら全国の罹患率が41%であることから考えると、これらのデータでの感染者数は少なすぎると考えられ、実際の患者数は十分把握されていなかったと推定される。

- ・小樽市における感染者数も明確には算出できないが、第1波発生1カ月足らずで2078人以上発病、その後2週間で2百数十名の死亡者が出ていることから、少なくとも全国平均並かそれ以上の患者数と死亡者数が出ていたと推定される。当時の小樽の人口が10万2千人であったことから算出すると、罹病率40%として患者数は4万8千人、患者の致死率を2.5%とすると、死亡者数は1200人となる。致死率は下記のデータからほぼ中央値としての2.5%とした。

小樽における患者の致死率	第2波	大正7年11月14日発表	患者総数2078人 死亡者数39人 致死率1.9%
		大正8年4月5日発表	患者総数276人 死亡者数7人 致死率2.5%
	第3波	大正9年1月21日発表	患者総数447人 死亡者数21人 致死率4.7%
		大正9年3月17日発表	患者総数3107人 死亡者数175人 致死率5.6%

・患者の症状は、第2波よりも第3波の方が明らかに重く、上記の致死率の推移がそれを物語る。この事実は国内でも同じで時の経過と共に致死率が高くなり、死亡者数も増えている。この説明としてウイルスが人に感染してゆく過程で変異を繰り返し、より毒性の強い株に変化してゆくからと考えられる。

・都市での流行が終息する頃に郡部での流行が目立ち、それも死亡率が高く、悲惨な結果となっているが、これは交通機関の発達していなかった当時の都市と郡部における人の交流が、現在よりも希薄であったことから、ウイルス伝搬が遅れ、流行後期に毒性を増したウイルスが郡部に到達し、閉鎖的の社会に一気に広がり、壮絶な惨事を引き起こしたと推定される。

・このスペイン・インフルエンザでは発症から死亡まで早いのが特徴である。集団がほぼ同時に罹患し短期間のうちに死亡する経過は、ある意味では食中毒にも似る。これはウイルスの感染力が強いことと、潜伏期間が短いことが理由と推定される。死亡の原因は気管支肺炎などと表現されているが、一般的肺炎とは異なり、免疫的過剰反応に基づいたサイトカイン・ストームによる肺組織の破壊に基づく死亡と考えられる。現在のH5N1鳥インフルエンザでの死因も肺組織の破壊に基づき進行してしまうと、医学的治療には大多数の例では反応しないようである。仮説としてサイトカイン・ストームが挙げられていて、多くの研究者はそれを支持している。

- ・全国と北海道における患者数と死亡者数

大正8年12月26日	内務省発表データ	
初発以来(第2波合計)	全国	患者数21,169,390人 死亡者数257,363人 致死率1.22% 罹患率37%
	北海道	患者数491,179人 死亡者数8,507人 致死率1.73% 罹患率15%

大正9年4月26日 内務省発表データ
前年記録以降(第3波) 全国

患者数2,285,000人
死亡者数119,000人
致死率5.2%

第2波と第3波合計

患者数23,450,390人
死亡者数376,363人
致死率1.6%
罹患率4.1%

国内、北海道および小樽におけるスペイン・インフルエンザ感染者と死亡数まとめ

	国内	北海道内	小樽内
人口	57,918,671	2,359,183	108,113
患者数	23,450,390	510,000以上	48,000
死亡者数	376,000	10,000以上	1,200

備考 国内の最終的流行終了は明確でないため、ここで用いた大正9年4月26日新聞報道のデータより以降にも多くの患者が発生したと考えられるが、それらの数値はここでは反映されていない。可能性から言って数万人以上の死者が出たものと考えられる。

資料

(1) 上ノ国流感記録 上ノ国町史から

スペイン風邪

大正7年世界的にスペイン風邪が流行したが、8年には日本全国に感冒が流行した。

大正9年2月、字上ノ国では部落会議を開き、各地に大流行の悪性感冒に対処するため、予防注射を施行することをきめた。衛生費を含み1戸平均50銭を集め、北里研究所へ注射液を発注したが、早速応じ得ない旨の返信があった。おくれると、鯉場へ出稼ぎに行く人々の出発後になるというので、一時中止することにしたが、3月に入ると各戸に患者が続発した。再び村役場を経て北里研究所に発注して薬品を取りよせ、衛生組合役員協力のもとに予防注射を実施したが、時すでに遅く、3月中旬から4月上旬にかけて、上ノ国、北村、中須田、苦符、湯ノ岱にかけて感冒が猛威を振り、死者116名の多きに達した。

一家枕を並べて床につく状態であったので看病する者もなく、それがまた家ごとであったから、見舞をすることもできない。雪はまだ残り、自転車とてないのに、1人の村医のおよぶところでもなく、死者があっても会葬する者もなく、3、5人の人でようやく埋葬をすませる惨状を呈した。親を失ない、妻を失ない、多くの悲劇のもととなった。

9年5月5日上ノ国(支村を含む)大留北村の有志は大供養を行ない、9月12日上国寺境内に大正9年春不慮病死者追悼碑を建立した。

(2) エトロフ島の惨状報告 北海タイムス 特派員報告から抜粋

死体を原野に運び山積して火葬す(大正9年6月6日)

...今回渡島、実際を目撃するにあたり、如何に悲惨を極めたるかに驚いた。猛烈なるは東海岸の留別村を中心として単冠湾沿線年萌と天寧村の間に在りて、その最も隆盛を呈せるは天寧なりしがごとく、同所和泉缶詰所を始め部落民一同ほとんど罹患者ならざるはなく、百名余の村民枕をつらね、片端より死亡しゆく有様にて、村医の所在地たる留別も同様の状態に陥り、亭主が死亡し、1時間後にその妻が逝き、子供が危篤という惨事を頻発し、村医も感染し行動の自由を失い、...

...看護人などの希望者なく、空しく親兄弟の死を傍観し...

...患者はもちろん、患者ならざる者も早晚全滅を免れずと予期し、息のあるまに少しでも旨い食物を摂るのを得策なりとて...

**小樽・北海道及び国内における
スペイン・インフルエンザの足跡
(1918年～1920年)**

小 樽 市

平成18年2月

Feb. 2006

年月	小樽	道内	国内
大正7年 10月26日			東京の悪疫流行 東京、各府県に流行。 東京市内各社、銀行、官庁などで欠勤者続出。内務省は各府県に予防を図ることを通達。
10月30日		札幌の各学校へも 感冒が襲来 旭川、札幌、函館での休校が顕著。感冒症状ある学童に欠席するように指導。悪性か否かは不明。	
11月2日		旭川区内の 流行感冒 各小学校で3割前後の欠席者	
11月3日	小樽にはびこる 流行感冒 小樽署で各学校へ調査。 760余名。	札幌の感冒 札幌区内学校で患者が続出。漸次学校から家庭へ、家庭から一般社会へ伝搬。 治療予防の途無し。 月寒町月寒小学校:30日から11月1日までに、407名の全校生徒中230名が発病。7日間の休校に。	
11月4日		札幌区内の 流行感冒 23校が休校に。	
11月6日	小樽区にても休校続々 小樽区には悪性の流行感冒侵入益々猛烈を極め、殊に小学生に患者続出。 潮見台小学校(900名): 3日10名、4日200名 5日60名。	小学校又々休校 札幌警察署衛生係調査: 17315人中2574人が罹患欠席	
11月10日		札幌区内の状況は、相変わらず蔓延しつつあり、いまだ終息せず。 師範学校付属小学校(425人)中93人の感冒欠席。8日間の休校。 区立女子職業学校(645人)中180人欠席者。8日間の休校。 他多数の事例が記載。	伝染猛烈なため細菌が確かめられるまで学者間でも疑問の流行熱と言われていたが、東京北里伝染病研究所で流行性感冒菌陽性と発表。
11月12日		感冒と休校追加 流行性感冒猶退却せず。区内10小学校休校にさらに休校が追加される。 西創成小学校(1475人)295人感冒欠席、そして出席児童404人が罹患。 女子小学校(1648人)606人感冒欠席。 中央創成校(1414人)294人の感冒欠席。他事例多数。 流行性感冒大学に侵入す 北大でも患者数増加。青年寄宿舍で1名急性肺炎で死亡の記載。 教務部では部長以外全員欠席。事務に差しかえる。	

11月14日	2千余名の患者 小樽の患者ますます猛烈 1日以来死亡35名 患者総数2078名 死亡総数39名 致死率1.9%	恐るべき感冒の死亡増加 3府各県に流行しつつある悪性の感冒は、すこぶる激烈にして、従ってその死者多く、火葬場は死者の入れた棺桶が山積みして保管料を徴収される。 豊平火葬場の混雑	
11月16日		流行感冒予防法 札幌警察署長談 通常の死者数の倍の20人が毎日死亡。 ・なるべく集会に立ち寄らず ・風呂では首より上を湯で洗わない ・床屋では鼻毛を剃らない ・患者と対話の際は両手で鼻口を被って細菌を防ぐ	
11月17日		全道の悪性感冒蔓延また蔓延の危険 旭川警察署の調べでは1日から10日までの死者数は60名。前年は17名。 13日17名、14日15名。 墓地は非常な混雑。棺桶の中には焼き切れていないものも散見。葬式もすこぶる質素。 各地の休校状況。 西班牙感冒、世界感冒(風)、流行性感冒	
11月20日		流行性感冒を偸みて投身 留萌の33歳主婦。家族が多数死亡したことから自殺。 各地感冒 上富良野、剣淵、神楽、江部乙 死亡者が多く葬式の会葬者もほとんどない状況。 函館感冒で死んだ人 区役所で調べたところ： 11月1日～18日まで78名(肺炎など感冒が原因となって死亡したと思われる死者)。16日16人、17日15人。他の日、毎日2～10人。	世界感冒 やや下火となってきた感。それでも大阪ではまだ流行。 大阪：12日の死者数419人中感冒での死者292人。焼き場3カ所で合計150釜。焼き切れず。連日5,60～100の死体が余っている。 東京：範囲が狭くなってきたが、病毒は濃厚になってきたようだ。10月中の死者数4031人。その大部分は感冒。
11月23日		札幌区内の感冒死亡 流行性感冒も暫時終息の様相なるが、札幌区役所へ届け出る死亡届は相変わらず多い。 感冒のため急性肺炎と心臓麻痺で死亡した人数。括弧内は全死亡数。 11日7人(15人)、12日7人(17人) 13日15人(25人)、14日14人(21人) 15日13人(28人)、16日13人(25人) 17日16人(23人)、18日8人(18人)。	

12月8日	悪性感冒貧民窟を襲う 今回の恐るべき悪性感冒に小樽区民二百数十名死亡。 稲穂町の労働者一家4人が死亡した記事。		
12月11日	妊婦と感冒 流産、早産多い記事。		
12月12日		札幌死亡率が減った 11月が最も死亡率が高く、平月の2倍半 急性肺炎 216名 流行性感冒 27名 心臓麻痺 10名 全死者数 463名	
12月27日		広尾感冒の惨状 広尾小学校(450名)中200名感染、11月26日以来3度の休校。 内浜方面村落では一家が残らず倒れるところも多い。 前浜小屋に死体。その脇に妻子3人枕を並べて打ち臥す。	
大正8年 1月8日		流行性感冒の犠牲者は本道で5008名 5歳までの小児はもっとも多い 道庁衛生課調査 10月15日～11月30日 流行性感冒あるいは合併症で死亡した死者数 男2760人、女2248人 合計5008人。 年齢内訳： ～ 5歳 1424人 25～30歳 621人 20～25歳 477人 30～35歳 442人 35～40歳 398人 15～20歳 355人 5～10歳 317人 40～45歳 253人 50～60歳 215人 感冒からの併発症： 急性肺炎、心臓麻痺、脳膜炎、心臓膜炎 腎臓炎、肋膜炎、... 12月中の調査はいまだ完成していないが、12月初旬に死亡者が多かったことから流行開始以来1万人は鬼籍に入ったものと想像される。	
1月9日		感冒犠牲者何処が多い 空知郡、函館区、上川郡、札幌区...	

1月23日		<p>北海道流行性感冒に於ける 犠牲者約8千人</p> <p>患者47万人 致死率 1.7% 人口236万 罹患率 20%</p> <p>10月15日より12月末日までの集計 男 4207人 女 3366人 合計 7957人</p> <p>各地において病死、あるいは治療を受けた者男24万3370人、女22万6994人、合計47万4359人</p> <p>本州で第2回の襲来を見ており、北海道でもぼつぼつ流行しつつあるようで警戒を要する。道庁衛生課員談。</p>	
2月4日			<p>悪性感冒いよいよ猛烈</p> <p>東京：流行性感冒(インフルエンザ)は本年に入り一層猛威を振るい、急性肺炎を併発し続出。</p>
2月5日		<p>東京に再興の悪性感冒</p> <p>札幌には幸いまだ流行していない 議会最中に内田外相が悪性感冒に罹って引きこもり、首相も罹ったと伝えられ、海軍の軍令部副官夫妻が3人の子供を残して死亡など、多くの知名人の発病や死が報じられる。</p> <p>しかし札幌の病院や開業医に聞き取り調査しても、流行の話はなく区役所の死亡届なども前年11月のような恐るべき数字は示していない。</p>	
2月6日			<p>東京都予防注意事項を発令</p>
2月7日			<p>患者81万人 感冒に罹った東京市民 人口 370万人 罹患率 22%</p> <p>1月の死亡者は昨年11月の倍 158人中1人が死亡</p>
2月14日		<p>北見感冒流行</p> <p>一旦患者数は減少していたが再び増加。容易に解熱せず。肺炎を起こす者も多い。</p>	<p>山縣公爵悪性感冒で重体</p>
2月15日		<p>東京において再燃。さらに悪性となっている。北海道でも再流行が懸念。</p>	

2月26日			<p>東京感冒死者漸く減ず 警視庁医務課発表 昨年10月～本年2月19日 感冒死者数7011人(東京市) 発病者100人につき76人余りが肺炎。2月上旬に比較すると死者数は減ってきているので大勢は終息に近いと思われるが、昨年12月に比較すると未だ患者数は多い。</p>
3月2日		<p>石狩悪性感冒再燃</p> <p>石狩町。昨年末漸く終息した悪性感冒が再燃の兆し。2月中に十数名発病。最近数名死亡。</p>	
3月4日	<p>小樽区の流行感冒者数 本年度流行数(2月25日調査) 患者数442人 死者数4人(致死率0.9%)</p>		
3月7日		<p>旭川感冒再燃の兆し 気管支肺炎流行 本年に入ってから死者は2名に過ぎなかったが、3日より突然死亡者505名発生。</p>	
3月16日		<p>岩内に悪性感冒再流行 悪性感冒は殆ど終息していたが最近流行の兆しあり。特に本州から漁場に出稼ぎに来た漁夫が続々発病。</p>	
3月19日		<p>芦別の感冒</p> <p>昨年一時大流行していたが、その後しばらく終息状態だった。昨今また流行し始め蔓延の兆候。最近死亡者数130名を越える。家族全員発病し、死亡した子供の葬儀さえ出せない悲惨な状況もある。</p>	
4月5日	<p>小樽の流行感冒者数 3月16日～31日 患者数276人 死者数7人(致死率2.5%)</p>		
4月6日		<p>流行性感冒の脅威から漸く逃れたが、その余波に注意。</p>	
10月5日			<p>今秋の流行感冒防止研究 伝染病研究所の山内博士。 菌を人間に注射したが微熱が出ただけだ。トラホームと同じ濾過性細菌である。 昨年大流行した世界風邪。 米国ニューヨークで先月37名の患者が出ただけ。</p>

11月30日		流行性感冒で小学校授業休止 上川郡登和里尋常小学校の在籍数117名のうち63名流行性感冒に罹り休校。	
12月9日	流行感冒調査 小樽警察署は例の流行性感冒が流行する前に防ぐために、内務省衛生局より回付された流行感冒予防心得の印刷物を、各派出所前に掲示。		
12月17日			呉海軍の悪性感冒 悪性感冒依然脅威を振るい、呉海軍病院に200名入院。
12月20日			五師団の死者200名を越す
12月25日	小樽流行感冒 小樽警察署から医師会へ問い合わせ 1日～15日 患者18名 死者なし		
12月26日			全国の流行感冒患者 初発以来の数字 全国 患者総数 21168390 人 対人口1000 370 人 罹患率 37% 総死亡数 257363 人 致死率 1.22% 北海道 患者総数 491179 人 罹患率 15% 死亡者数 8507 人 致死率 1.73% 東京 総患者数 1421980 人 罹患率 39% 死亡者数 13574 人 致死率 0.95 大阪 致死率 2.38% 石川県 2.74%
大正9年 1月1日		流感の魔手 札幌区各小学校は昨朝から一斉に休校 全小学児童13000人中罹病児童3900名 罹患率30% 各学校の罹患者数記載	

1月9日		<p>札幌を襲いつつある恐るべき流行感冒</p> <p>昨年未からまた流行性感冒が蔓延してきた。 12月20日から1月5日まで死者50余名。</p>	<p>感冒全国を風靡</p> <p>昨冬猛烈の勢いにて再び流行し始めた悪性感冒は今や全国に風靡し、おびたしき患者数を出している。 内務省への16県の患者数だけでも9718名。 九州地方 元日から5日まで2000名の患者。 20名死亡。 鹿児島県末吉村 全村民発病、90人死亡。</p>
1月14日	<p>小樽流行感冒調査と医師会</p> <p>小樽区の流行感冒は、昨年未小樽署の調査にて罹病者94名中死亡者4名。 警察署から医師会、学校へ発生患者数の問い合わせ。</p>	<p>流行感冒ますます拡大</p> <p>札幌 今回の流行は昨年11月下旬より始まり、12月中の罹患者707名、死者16名。 1月1日～10日 患者数1099人。 死亡者33人。 1日当たり患者発生数 12月 23.6人 1月 110人 致死率 12月 1/44(2.3%) 1月 1/33(3%)</p>	
1月15日			<p>感冒予防と防疫官</p> <p>内務省は各地方に防疫官を派遣して、流行性感冒予防の対策強化をはかることとなった。 電車等乗車の際のマスク着用義務を府県令でもって定めることも差し支えないと通達。 11月より今日まで1400人死亡。</p>
1月16日		<p>死に導く流行感冒</p> <p>シベリヤ風邪の魔の手は、今や全道を襲わんとす。各地の状況を看よ。 全道 本年の患者数 1327人 死者数 39名 致死率 2.9%</p> <p>豊平の火葬場戦場のごとし 昨今次から次へとやってくるおびたしい死骸で、全く焼き切れていない状態。 元日から15日正午まで札幌区役所に届けられた死亡のみで既に168名と1日平均16人余。 同火葬場には10個の”かまど”があるが、到底焼き切れていない。</p>	

1月18日		<p>月寒連隊は流感患者なし 極力予防に努め、外出禁止、予防注射、毎食後うがい、マスクの着用、外来者にもマスクの着用。</p>	
1月20日		<p>全道流行感冒 全道各地を襲いつつある流行感冒患者は日毎に増加しつつある。 札幌区 11月初発以来1月15日まで2137人、死亡者57人(致死率2.7%)。 小樽区 348人、死亡者14人(致死率4%) 函館区 415人、死亡者28人(致死率6.7%) 札幌 11日から15日 1038名、死亡者24名。(致死率2.3%) 予防はマスクと食塩水でのうがい。</p>	<p>感冒の「死の手」 東京 一家五人皆死に絶ゆ 僧侶も読経を謝絶す 当局の必死の努力もその効さらになく、日々多数の新患死亡者発生。 17日 深川区 59名死亡 本所亀井戸小松川署管内80名死者。 神田区製本業を営む40歳男性宅では13日から18日までの間に、夫婦と3人の子供達が死亡。また同区の裁縫業妻(30)、長男(13)、および看護にきた両親の4人が死亡。葬式を出す者もない。</p>
1月21日	<p>小樽流行感冒は比較的少数 内地はもちろん、本道、札幌区外各所の悪性感冒猛烈。小樽警察署は先頃、管内の医師、小学校、工場などで調査。 小樽区の感冒少数と判断。 医師会の調査 1月1日～18日 男237名 女210名 死亡者 男12名、女9名 (致死率4.7%)</p>		
1月25日		<p>札幌区内流感死亡者 1月13日～22日 70名 総死亡者の半数が流感 全道の流行感冒新患者 1月16日～18日 2822名、死亡者92名(致死率3.26%) 流感ついに月寒連隊を襲う 患者24名発生。</p>	
1月28日			<p>流感死亡者2万余 内務省 流行性感冒はますます隆盛 1月25日現在の全国患者数は78万人、そのうち死亡者2万1千人</p>
2月3日		<p>留萌1月中の流感患者200 留萌町感冒の流行緩やかに。1月中に219名の患者。死者は僅かに2名に過ぎない。</p>	

2月5日	<p>小樽流感予防宣伝</p> <p>小樽区では流行感冒予防の大宣伝。 小樽区役所衛生係の協力で小樽暑が2台の馬そりを借り受け、赤旗と楽隊を載せ、印刷物5万枚を区内で配った。</p>	<p>道庁衛生課</p> <p>1月25日～31日 発生患者数3060人 死亡者数167人 致死率5.5%</p> <p>前年12月1日以降 発生患者数21961人 死亡者数1000人 致死率4.6%</p> <p>網走感冒流行</p> <p>1月末まで医師からの届け出数70名、死亡9名。 前年の感冒に比し悪性にて、直ちに肺炎を併発。</p> <p>恵庭感冒</p> <p>恵庭村 1月下旬から流行性感冒発生し、患者数570名。 松園小学校 340名中156名発症。</p>	
2月28日		<p>旭川地方流感</p> <p>20日までに死亡者27名。最近流行の兆しがあり、日に2、3名の死者発生。</p>	
3月17日	<p>小樽流感死亡増加</p> <p>1月1日より発生総数3107名、死亡者数175名 致死率5.6%</p>		
4月9日		<p>酸鼻を極むる上の国流感</p> <p>3月以来ますます隆盛。死亡者続出の状態。悲惨言語に絶する。 布施石五郎宅 妻子4名枕を並べ、手と手を取り合わせて絶命。出稼ぎ中の石五郎帰宅。4名の死骸を火葬に附し帰宅してみれば、病臥中の残りの子供も死亡。 既に死者百余名。</p>	
4月12日		<p>根室流感隆盛</p> <p>根室町の流感は初発以来些かも退歩の模様なく、全町大半の家庭を冒し、一家全滅、あるいは乳飲み子を残して親の死する者など、悲惨を極めている。なお終息の様子なし。</p>	
4月14日		<p>流感檜山を襲う</p> <p>日増しに猛威をふるう。 上の国村周辺の農村では初発以来僅か2週間で6百数十名の患者。死亡者80名余。(致死率13%)</p>	

4月26日			<p>東京都</p> <p>一時鳴りを静めた流行性感冒は最近又復活。 3月21日～31日 発生患者数770名 4月1日～10日 発生患者数8136名 死亡者数716名 致死率8.8%</p> <p>全国</p> <p>昨年の初発以来 発生患者数228万5000名 死亡者数11万9000名 致死率5.2%</p>
5月26日		<p>余市流行再発</p> <p>余市町の流感は一時終息の様様であったが、最近再発の状況で過去10日間で累計40名発症。1名死亡。 蘭島方面は目下猛烈流行を極め、現在患者数16名、死亡者1名。</p>	
6月6日		<p>死体を原野に運び山積して火葬す。惨状目も当てられぬエトロフの流行感冒哀話</p> <p>(5月26日特派員発)</p> <p>...部落民一同罹病者ならざるはなく、百名余の村民枕を連ね、片端より死亡。</p>	
12月29日		<p>札幌を襲える流行感冒</p> <p>前年大流行を与えたる流行感冒は、今年はその流行はなく、道民の幸福この上もなき事ながら、最近の調査で流行感冒と思われしきもの52名あり、いずれも軽症の由。</p>	